

筑後国府跡

—— 第168次調査 ——



2000

久留米市教育委員会

序

筑後川がもたらす水と、水縄山地から広がる緑に恵まれ、交通の要所でもある久留米市は、古代には筑後国府・国分寺が置かれ、近世は有馬氏の城下町となるなど、筑後地方の政治・経済・文化の拠点都市として発展を続けています。

本書で報告する筑後国府跡第168次調査地点は、久留米市東部の朝妻町に所在しますが、ここは水縄山地の西端に位置する高良山麓の低位台地上にあり、御井郡の名前の基となった三泉の一つ、「朝妻清水」の湧水を水源とする井田川が北流する、恵まれた環境にあったことから遺跡も多く、縄文・弥生時代、奈良～鎌倉時代の遺構を中心とした遺跡が既に多数調査されています。特に平安時代後期～鎌倉時代頃には筑後国府の第3期政庁や、政庁が御井町横道地区へ移転した後は、高良大社所蔵文書の『高良記』に見られる「在国司居屋敷」との関連が注目される重要な遺構が検出されている地区です。

今回の調査は朝妻町の南部で実施したもので、平成5年度の第122次調査の際に検出された遺水遺構の南側延長部や、弥生時代、奈良～鎌倉時代の遺構が多数検出される貴重な成果が得られています。

本書では時間等の制約から調査成果の概要紹介に止めざるを得ませんが、ここに地権者 氏を始め、調査に際してご指導・ご協力頂きました関係各位に対して厚く御礼を申し上げますと共に、本書が文化財に対する理解・普及や、学術資料の一つとして広くご活用いただけますならば、幸甚に存じます。

平成12年9月30日

久留米市教育委員会
教育長 桑野 善吾

例 言

1. 本書は久留米市朝妻町に所在する、筑後国府跡第168次調査地点の発掘調査の記録である。調査は共同住宅建設工事を原因とする事前の調査であり、発掘調査から報告書作成に至る費用は 氏が負担した。
2. 発掘調査は 氏と久留米市教育委員会が締結した委託契約に基づき、久留米市教育委員会が主体となって実施したもので、教育文化部文化財保護課の水原道範が調査を担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図は水原の他、香月清子・小林美佐代・井手輝子・勝田美咲が作成し、遺物の実測と図面の浄書は畠中和子が行なった。写真撮影は水原が行なった。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成しており、図中の方位はすべて座標北を示す。また、本書中に使用した遺構の略表記は次のとおりである。
SI……竪穴住居 SD……溝 SK……土坑 SP……柱穴・ピット
SX……その他の遺構
5. 第168次調査の遺跡略記号はTKH-168、調査番号は200002である。
6. 調査に関わる諸記録・遺物は、すべて久留米市埋蔵文化財センターへ収蔵・保管されている。
7. 本書の執筆・編集は水原が担当した。

I. はじめに

1. 調査に至る経過

筑後国府跡第168次調査は、平成11年11月17日、地権者[REDACTED]氏より久留米市朝妻町1402・1番地における共同住宅建設に伴う、埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことを端緒とする。これに対し、久留米市教育委員会では、対象地が第3期政庁推定地の東側隣接地に当たり、特に対象地の東半部に配置された建物建設予定部分には、第122次調査や第109次調査など近隣の調査の際に検出された遺水遺構と考えられる遺構や溝などの南側延長部が存在する可能性が高いことから、協議を行い、建物を対象地西側へ配置する設計の変更がなされた。その建物部分については、平成12年1月31日に試掘調査を実施したところ、東西溝やピットなどの遺構が検出されたため、さらに協議を行い、西半部を中心に発掘調査を実施し、駐車場となる東半部については、遺構の状況把握を目的とした確認調査を行なうことで協議が成立した。

その後、平成12年4月18日に地権者より発掘調査の依頼書が提出されたことを受け、文化財保護法による諸手続きを進め、4月21日に[REDACTED]氏と久留米市長白石勝洋との間で「筑後国府跡第168次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わし、4月25日より現地における発掘調査を開始した。

2. 調査の概要・経過

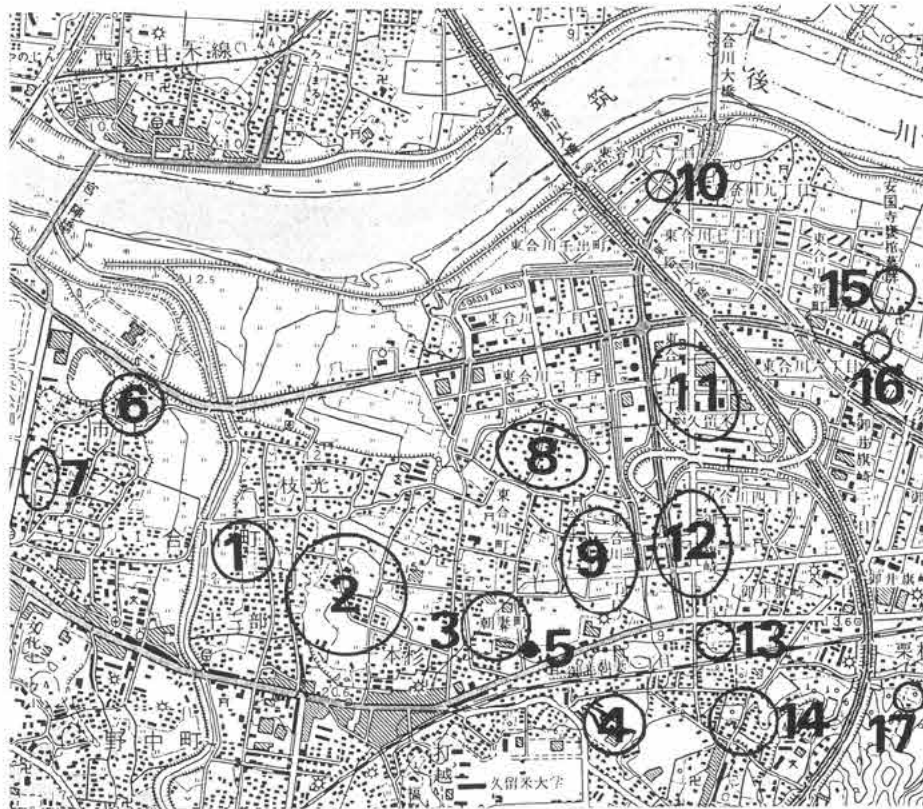
調査は協議の成果を受けて、対象地970㎡の内、西半部の建物建設部分約377㎡分を中心に調査し、駐車場となる対象地東半部については、西側調査区東北端部から南北約6m、東西約21mの約126㎡分について調査区を設定し、基本的に上面確認を行なう予定で平成12年4月25日に調査を開始した。

遺構検出作業が進むにつれて、第122次調査検出の遺水遺構SX4322の南側延長部となる遺構の残存状況が明らかとなり、SX4322は全国的に見ても類例の少ない貴重な遺構であることから、SX4322を中心とした東半部の調査を地権者[REDACTED]氏に申し入れたところ、快諾していただいた。西半部の調査は5月18日に終了したことから調査区を反転し、同月24日より東半部の調査を開始した。東半部はSX4322の状況把握に努め、その他は若干の遺構を掘り下げに止め、調査は7月5日に完了。SX4322については僅かに基底部が残るのみであることが予想されたことから、SX4322付近については耕作土の除去のみを重機で行い、その後包含層から人力で掘り下げ検出作業を行なった。その他、遺構の状況に応じて随時調査区を拡張して遺構検出作業を行なったことから、最終的な調査面積は636㎡に及んでいる。

遺構の記録は、全体として遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を用いて遺構実測図を作成したが、主要遺構については水系メッシュ法を用いて個別遺構図(1/10・1/20)を作成し、写真記録は6×7版白黒写真、35mm版白黒・カラーリバーサル写真で行なった。

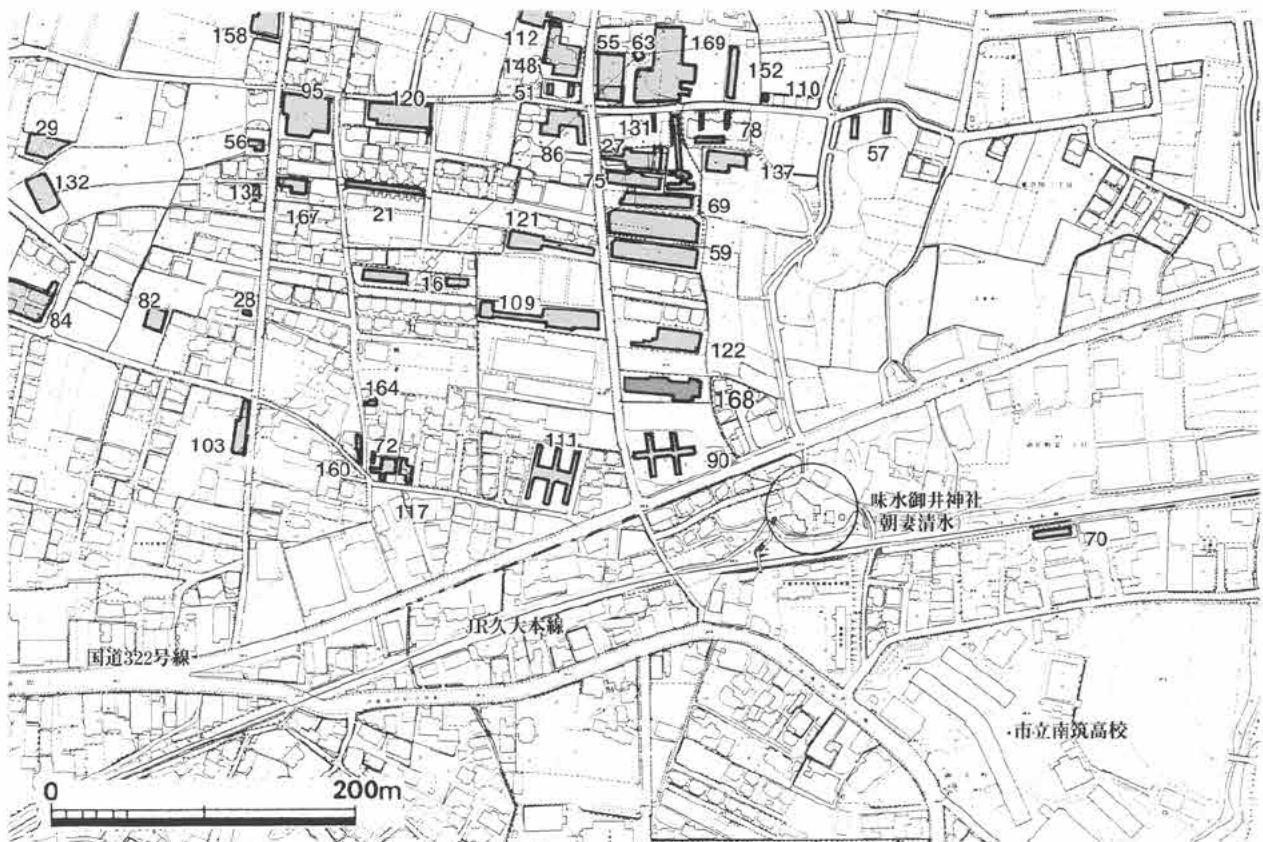
また、6月11日には市民へ向けて現地説明会を開催した。当日は75名が来訪されたが、その後もほぼ毎日見学者があり、現地調査の終了までには合計240名の方が来訪された。

なお、調査に際し、渡辺正気(福岡県文化財保護審議委員)、田中正日子(第一経済大学教授)、坂上康俊(九州大学助教授)、鶴久嗣朗(久留米市文化財専門委員)の諸先生には、現地でのご指導を頂き、JAくるめ野菜集荷場、及びJAくるめやすらぎの皆様には、駐車場や写真撮影の際に色々と便宜を図って頂いた。ここに記して御礼申し上げます。



- 1.Ⅰ期政庁（古宮）
- 2.Ⅱ期政庁（枝光）
- 3.Ⅲ期政庁（朝妻）
- 4.Ⅳ期政庁（横道）
- 5.第168次調査地点
- 6.市ノ上北屋敷遺跡
- 7.市ノ上西屋敷遺跡
- 8.西小路遺跡
- 9.へボノ木遺跡
- 10.新婦遺跡
- 11.下見遺跡
- 12.神道遺跡
- 13.篠田遺跡
- 14.二本木遺跡
- 15.安国寺甕棺墓群
- 16.松ヶ本遺跡
- 17.山川前田遺跡

第1図 調査地点の位置と周辺の遺跡分布図(1/25,000)



第2図 周辺の調査地点位置図(1/5,000)

Ⅱ. 検出遺構・遺物

1. 調査区の土層

調査区北東部における基本層序は、現地表から順に、耕作土(40cm)、遺物を包含する黒色土(20cm)を経て地山の茶色土に至り、茶色土上面が遺構検出面となる。遺構検出面は調査区南西部から調査区北東部へ向かって低くなっており、両端部間では約80cmの比高差を測る。遺物包含層の黒色土は調査区北東部のみ残存するが、これは昭和30年代後半頃に調査地周辺の畠地を水田化する際、南西部から北東部へ傾斜していた土地を均すため、重機を用いて西部から南部を削平したことによるものである。そのため北東部以外の部分については、現地表から30～40cmの厚さで積まれた耕作土の直下が遺構検出面となる。

2. 検出遺構

遺構はほぼ全面で検出されるが、調査区の西側においては、遺構の分布が疎となる。

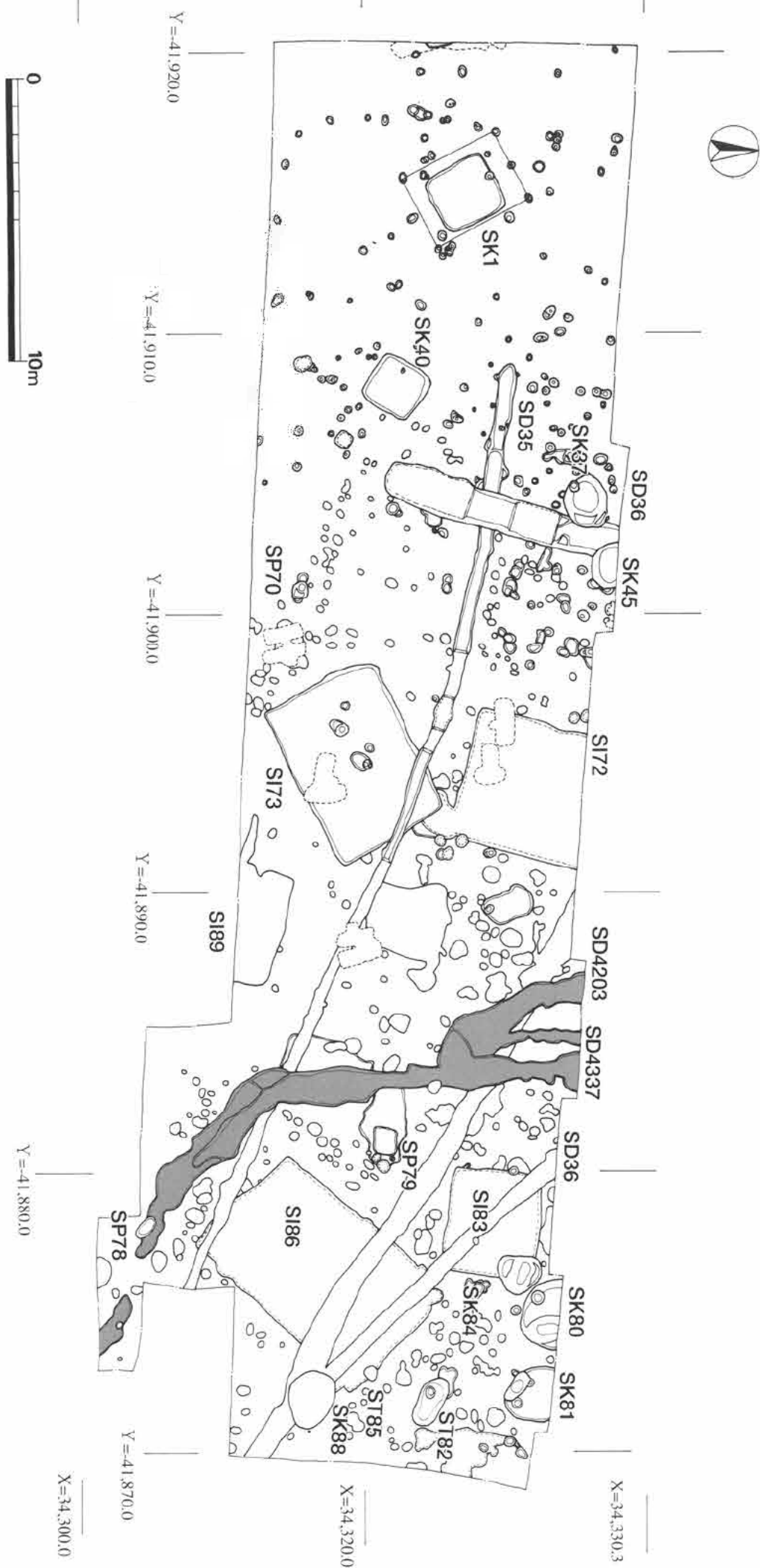
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居4軒、溝4条、土坑7基、土墳墓2基、遺水遺構1、ピット群である。先述したとおり、駐車場となる東半部は遺構分布状況の確認を主としたため、完掘した遺構は少ない。



Fig.1 第168次調査西半部全景(西から)



Fig.2 第168次調査東半部全景(北から)

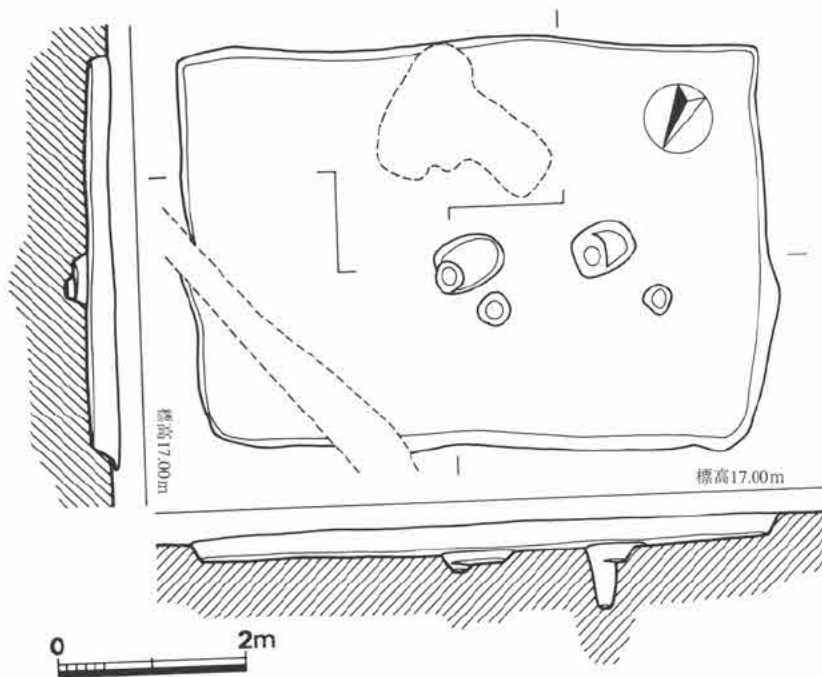


第3図 第168次調査遺構配置図(1/200)

3. 弥生時代の遺構

竪穴住居

S I 72 調査区中央部で検出した。遺構は調査区外へ延びるが、東西幅4.7m、南北長は4.8m分を検出し、平面形は長方形を呈する竪穴住居である。一段掘り下げたのみであるが、この遺構を掘り込む電柱支脚の基礎の断面からは、深さは30cm前後と見られる。



第4図 SI 73実測図(1/80)

検出され、東側柱穴は検出されていない。底面には貼床は認められず、炉の周辺にのみ硬化した部分が認められた。また、炭化した建築材が僅かに残ることから、焼失した住居と見られるが、焼失後に片付けを行い暗褐色土で一度に埋め戻したもののらしく、埋土中には焼土・炭化物はほとんど観察されず、遺物は底面から弥生土器の甕・高坏破片が3点出土したのみである。

S I 86 調査区東部で検出。長辺7.5m、短辺4.8mを測り、平面形は長方形を呈する。この遺構は上面検出を行なったのみで、掘り下げを行っていない。SD35・4203・4337よりも先出する。



Fig.4 SK1(南から)

57点・黒耀石剥片1点・焼粘土塊1点などが出土。



Fig.3 SI 73(南東から)

S I 73 (第4図・Fig.3)

SI72の南側で検出した。長辺6.2m、短辺4.3mを測り、平面形は長方形を呈する。深さは20～30cm。

底面の中央には径60～70cm、深さ10～20cmの楕円形の炉を設ける。主柱穴は2本と見られるが、西側にのみ柱穴と推定されるピットが

土坑

S K 1 (Fig.4) 調査区西部で検出した土坑。平面形は一辺2.3mの方形を呈し、深さは20～30cm。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土中に直径5cm前後の黄色ブロック土が多量混入した一括埋土で、検出面付近のみ少量の炭化物が混入していた。この土坑は四隅付近に、直径・深さ共に30～40cmを測り、柱穴と見られるピットが伴うことから、約130m北側に所在する第69次調査SK3163・3174と同じく、蓋や屋根などの施設を伴う貯蔵穴と想定される。遺物は埋土中から、弥生土器甕細片

4. 歴史時代の遺構

竪穴住居

S183 調査区北東部で検出。一辺3.2～3.8mを測り、平面形は方形を呈する。この住居は1段掘り下げたのみであるため、詳細は不明であるが、北壁中央付近にのみ焼土・白色粘土の塊が検出され、北壁にカマドを設けていたと見られる。SD4337とSK84よりも先出する。

S189 調査区中央部の南側で検出。遺構は調査区外へ延びているが、平面形が一辺4.1m前後の方形を呈する竪穴住居と見られる。この遺構は上面検出をしたのみで、掘り下げは行っていない。西壁中央から煙道部を約1.8m分検出し、西壁側にカマドを設けていたようであるが、焼土などは全く認められずカマドは最後に破壊されたものと見られる。

溝

4条の溝を検出。その内SD35・4203・4337の3条の東西走行の溝は、朝妻清水湧水点を水源とし、官衙域内への導水を目的として掘られた溝と考えられる。

SD35 調査区南東部から北西部にかけて東西走行する溝。南東側は調査区外へ延びているが、約35m分を検出した。掘り下げは西側の一部しか行っていないが、上端幅50cm前後、底部幅30～40cm、深さ30～40cmを測る。断面はU字状を呈し、埋土は暗褐色土中に少量の細かい黄色土ブロックが混入した土による一括埋土で、埋土中からは土師器・黒色土器A・B類、弥生土器の細片、黒耀石剥片、焼粘土塊が出土した。SI73・86よりも後出し、SD36・SX4322よりも先行する。

SD36 調査区中央部西側で検出した南北溝。遺構は北側が調査区外へ延びているが、8.5m分を検出。第122次調査では検出されていないため全長は26m以内に収まるものと判断される。一部しか掘り下げは行っていないが、断面は逆台形状を呈し、上端部幅1.3m前後、底面幅70～90cm、深さ40cmを測る。

SD4203 調査区東部から中央部北側へ走行する溝。この溝はその位置関係から、第109次調査検出のSD4203の南東延長部となる溝で、今回23.1m分を検出したことにより、約110m分の存在が判明した。上端部幅は80cm前後、掘り下げはSX4322サブトレンチ内の約30cm分しか行っていないが、底面幅は60cm、深さは45cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土中に直径5cm前後の褐色・黄色土ブロックを少量含む土によって一度に埋め戻されている。遺物は土師器細片6点が出土したのみ。SI86よりも後出し、SX4322、SK88よりも先行する。

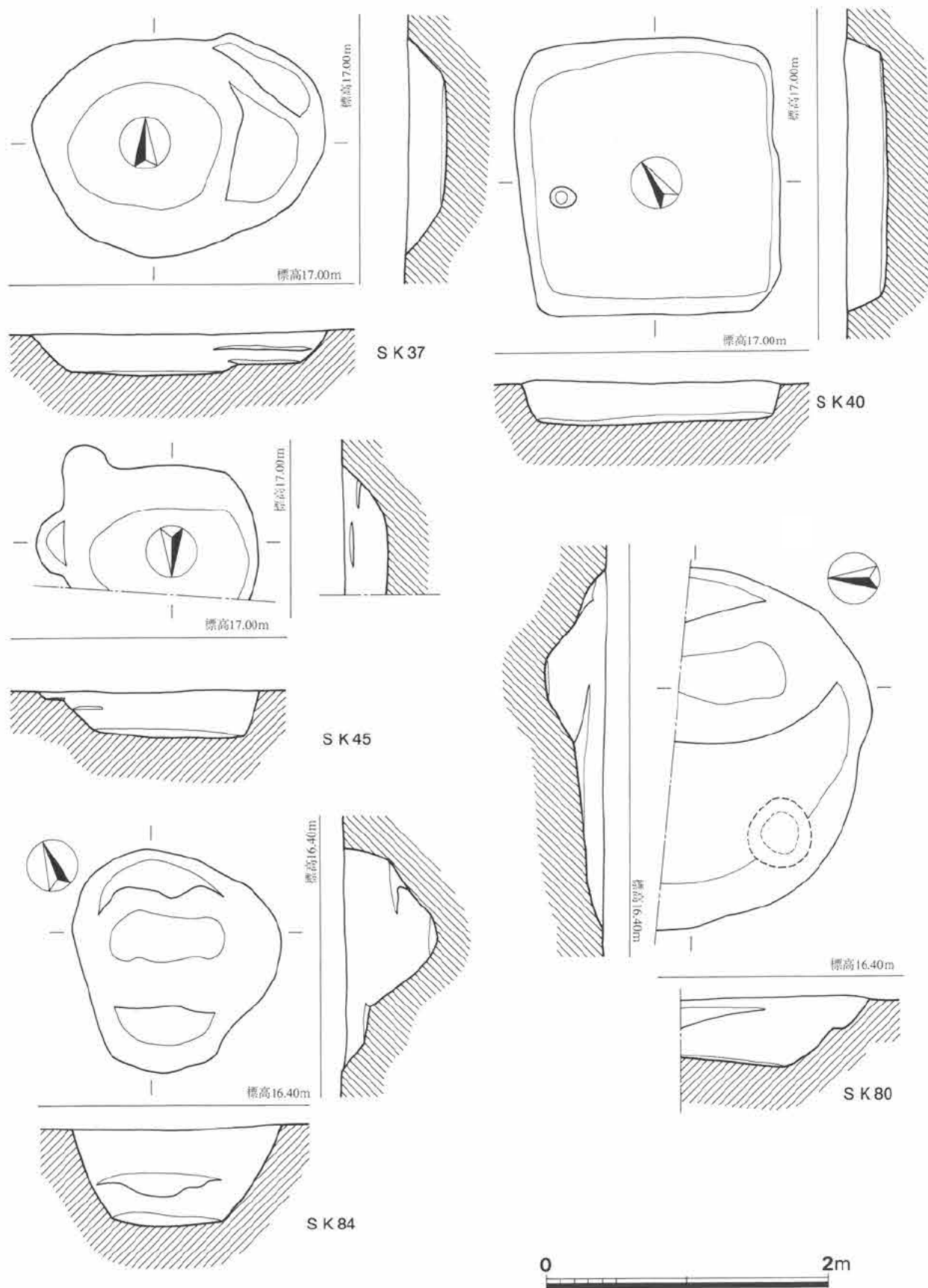
SD4337 調査区東部を斜行する溝。この溝の北西延長部は第121・122次調査の際に検出され、今回11m分を検出したことにより、126m分の存在が確認された。上端部幅は50cm前後、掘り下げは行っていないため、詳細は不明である。調査区東端部でSD4203から分岐した溝と見られるが、分岐点部分に後出するSK88が掘り込まれているため明確ではなく、SD4203よりも時期が前後する溝である可能性もある。SI83・86よりも後出する。

土坑

SK37 (第5図・Fig.5) 調査区中央部の北西側で検出。平面形は長軸1.9m、短軸1.5mを測る楕円形を呈し、深さは25cm。埋土は黒色土中に少量の褐色土と炭化物を含む一括埋土で、土師器・須恵器・黒色土器A・B類・瓦器・白磁・越州窯系青磁・平瓦・弥生土器・黒耀石・焼粘土塊が出土した。



Fig.5 SK37・45(南から)



第5図 SK37・40・45・80・84実測図(1/40)

SK40 (第5図・Fig.6) 調査区西部で検出。平面形が一辺1.9m前後の方形を呈する。深さは30cm。底面は平坦であるが、西側に長軸20cm、短軸15cm、深さ10cmを測るピットが検出された。埋土は暗褐色土中に多量の黒色土と明褐色土が多量混入した土による一括埋土で、埋土中からは土師器細片4点・黒色土器A類の碗1点・弥生土器片4点・黒耀石剥片1点、底面から黒色土器A類碗2点が出土している。

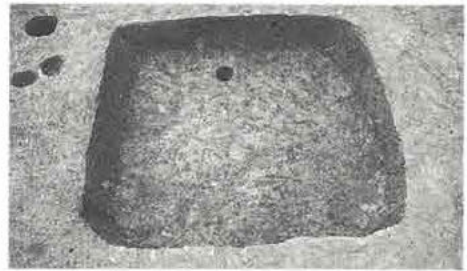


Fig.6 SK40(東から)

SK45 (第5図・Fig.5) SK37の東側で検出。遺構は調査区外へ延びるが、長軸1.5m、短軸90cm分を検出。平面形は楕円形と推定され、深さは30cm。埋土は黄色土・暗褐色土・黒色土による一括埋土で、埋土中からは土師器1,171点・黒色土器B類細片6点・瓦器細片6点・平瓦片1点・白磁片5点・弥生土器片1点・黒耀石製石鏃1点と、今回の調査で最も多量の遺物が出土した。SK6よりも後出する。

SK75 調査区中央部で検出。長軸1.7m、短軸1.0m、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色土で、土師器細片43点、須恵器甕2点、黒色土器A類細片1点、瓦器細片1点、弥生土器片4点が出土。



Fig.7 SK80(南から)

SK80 (第5図・Fig.7) 調査区北東拡張部で検出。遺構は調査区外へ延びるが、東西2.6m、南北1.4m分を検出し、平面形は円形、もしくは楕円形を呈する。底面は東側が一段深くなり、深さは10～40cm。埋土は暗褐色土による一括埋土で、埋土中からは、土師器細片197点・須恵器甕破片15点・黒色土器A類細片5点・黒色土器B類2点・瓦器碗2点・白磁細片3点・青磁細片1点・灰釉陶器細片1点・平瓦片4点、不明土製品1点・黒耀石剥片2点・焼粘土塊6点が出土した。

SK81 (Fig.8) SK80の東側で検出。遺構は調査区外へ延びるが、東西2.0m、南北は1.7m分を検出し、平面形は楕円形を呈すると見られる土坑である。深さ20cm。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土に黒色土が多量混入した褐色土による一括埋土で、埋土中には、土師器細片(坏・碗・小皿)129点・須恵器甕破片7点・黒色土器A類細片6点・同B類小皿細片6点・瓦器細片1点・越州窯系青磁片1点・灰釉陶器碗片1点・白磁細片1点・黒耀石1点・焼粘土塊10点が出土。ST82よりも先行する。

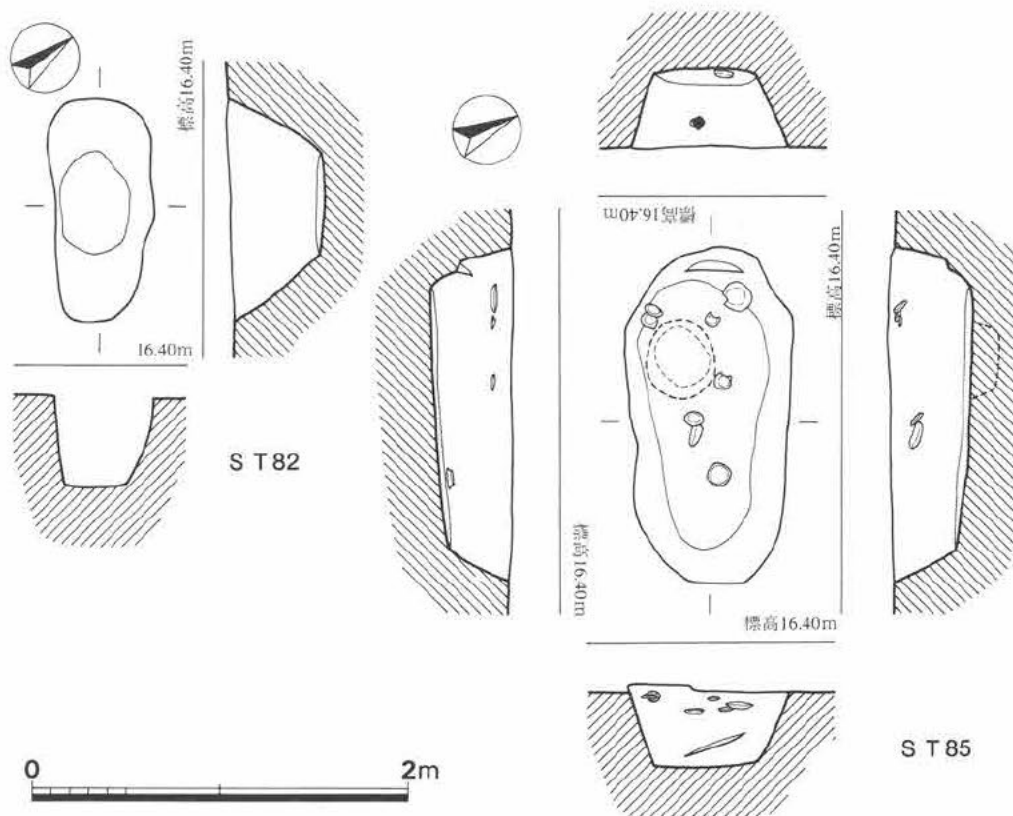


Fig.8 SK81, ST82(南から)



Fig.9 SK84(南東から)

SK84 (第5図・Fig.9) SK80の南西側で検出。平面形は1.6m前後の楕円形を呈する。底面は中央部が一段深くなり、深さは15～65cmを測る。埋土は暗褐色土中に多量の焼土が混入した一括埋土で、土師器31点、須恵器甕5点、黒色土器A類細片2点、同B類細片1点・瓦器碗片2点・白磁碗片4点・龍泉窯系青磁片1点・土錘1点・焼粘土塊16点などが出土。SI83よりも後出する。



第6図 ST82・85実測図(1/40)

土墳墓

ST82 (第6図・Fig.8) SK81を掘り込む土墳墓。

平面形は楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸50cm、深さ50cmを測る。主軸方位は52度西偏する。埋土は褐色土と黒色土が多量混入した暗褐色土による一括埋土で、埋土中からは土師器細片12点・須恵器甕片1点・黒色土器A類

細片2点・同B類細片1点・弥生土器細片1点・サヌカイト剥片1点・焼粘土塊4点が出土したが、人骨や副葬品と見られる遺物は出土していない。

ST85 (第6図・Fig.10) 調査区東部で検出。長軸1.8m、短軸90cm、深さ40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。主軸方位は65度西偏。埋土は暗褐色土による一括埋土。遺物は土師器細片621点、須恵器甕片15点、黒色土器A類21点・同B類細片19点・平瓦片1点・緑釉陶器細片1点・青磁細片2点・白磁片16点・黒耀石剥片7点が出土したが、これらの遺物は第9図に図示した土師器碗底部片が底面から出土した他は、全て検出面から約20cmの深さの範囲内において出土したものである。また、人骨などは発見されていない。

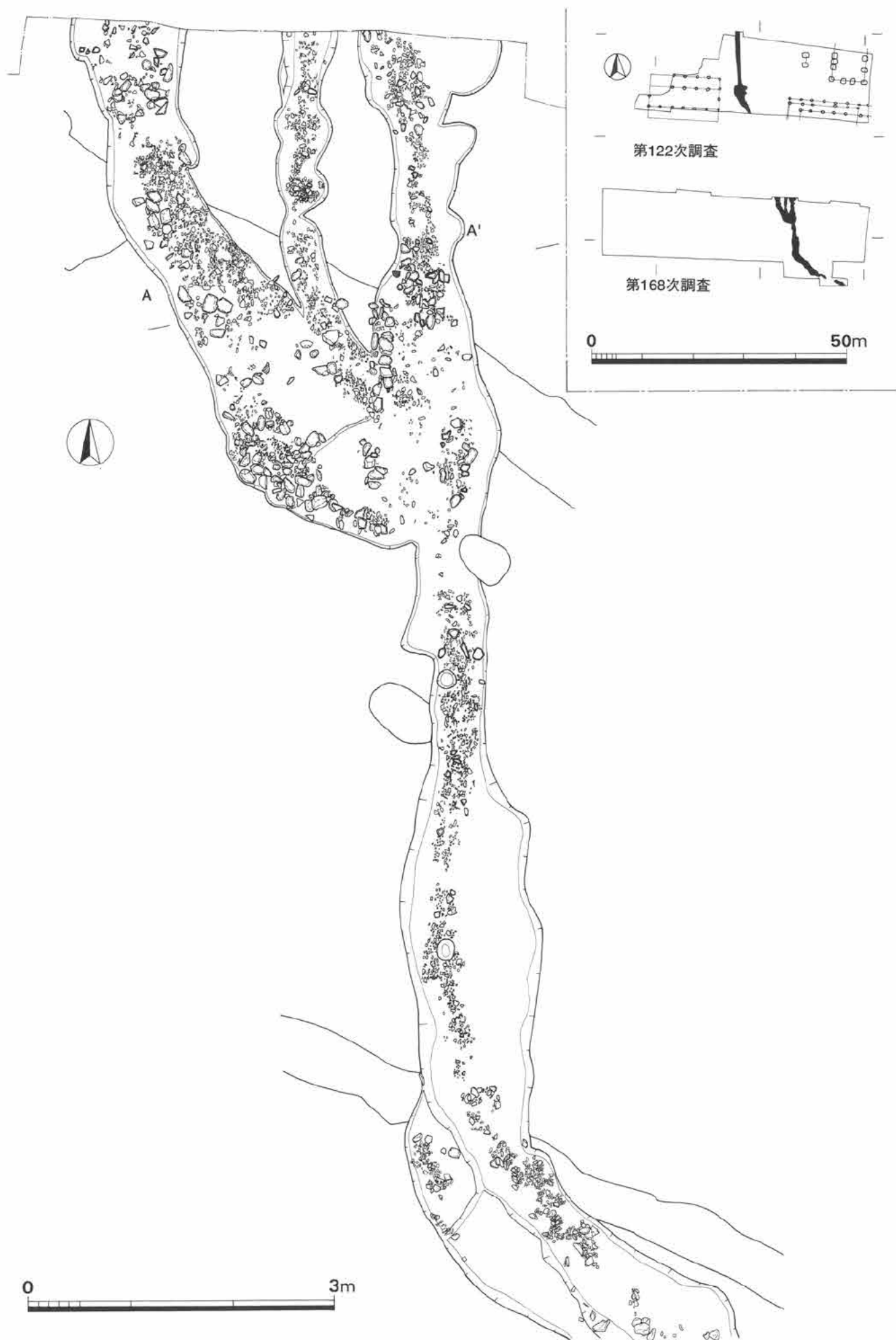


Fig.10 ST85 (南から)

遺水遺構

SX4322 (第7・8図・Fig.11・12) 調査区中央部で検出。第122次調査の際に検出されたSX4322の南側延長部にあたる遺構で、今回は約20m分を検出し、前回検出分と合わせて約50m分の存在が判明した。この遺構は、調査地の約100m南東側に所在する朝妻清水を水源とした遺水遺構と推定される遺構である。

幅は場所によって広狭があり、0.6～2.1m、上部は削平を受け、深さは5～20cm前後しか残存しないが、断面はU字状を呈していたと推定される。底面のレベルは南側から北側へ向かって低くなり、約20～30cmの比高差を示す。溝底は第122次調査検出分と同様に、土師器・須恵器・黒色土器A類・同B類・白磁・青磁・緑釉陶器を1～10cm程度に砕いて突き固めているが、北端部の底部は丁寧に突き固められていることに対し、南側は雑で硬化面が認められない部分もある。遺構の両端部には主として片岩を使用した拳大の



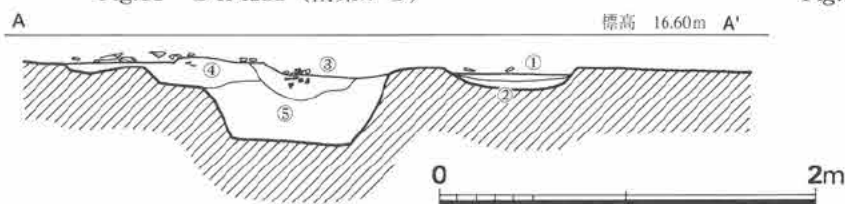
第7図 SX4322北半部実測図・検出状況図 (1/50・1/1,000)



Fig.11 SX 4233 (南東から)



Fig.12 SX 4233北端部 (南から)



- ①暗褐色土
- ②明褐色土
- ③黒色土
- ④褐色土
- ⑤暗褐色土

第8図 SX4322・SD4203土層実測図(1/40)

また、北端部では流路が3条に分かれるが、これは同時存在ではなく、当初の西側の流路から、中央流路、さらに東側流路へと2度変更されたものである。流路が変更された一つの理由としては、西側流路の溝底レベルが西側から東側へ低くなる地形上の制約もあって、SX4322中央部よりも約5cm高くなることから、水流に支障があったと想定される。

SX4322の時期については、底面の地形中から検出された土師器の内、底部の切り離し手法が判明する坏・小皿など37点の中に糸切り手法のものは全く認められないことに対し、埋土中から出土した土師器坏107点・小皿64点の中では、坏が1点、小皿は4点に糸切り手法のものが認められることや、SD35・4203よりも後出することなどから、11世紀代頃に出現し、12世紀初頭～前半代頃には埋没したものと推定される。

その他の遺構

SP70 調査区中央部南側で検出したピット。直径50cm、深さは10～30cmを測る。褐色土の埋土中からは、土師器坏3点・碗1点・細片1点の他、丸瓦片2点、黒色土器A類碗1点、弥生土器甕1点が出土。



Fig.13 SP79遺物出土状況(東から)

SP78 SX4322南部を掘り込むピット。長軸80cm、短軸50cm、深さ35cmを測り、平面形は楕円形を呈する。暗褐色土の埋土中からは、土師器小皿片7点、細片7点が出土。

SP79 (Fig.13) SX4322中央部の東側で検出。平面形は1辺85cmの方形を呈し、深さは15cmを測る。この遺構は検出面付近において、土師器坏・碗・小皿、黒色土器A類碗、同B類碗、石製品など90点の遺物が、完形に近い状態でまとまって出土したが、それらの遺物を取り上げた後、褐色土の埋土中からは4点の土師器片が出土したのみであった。

5.出土遺物

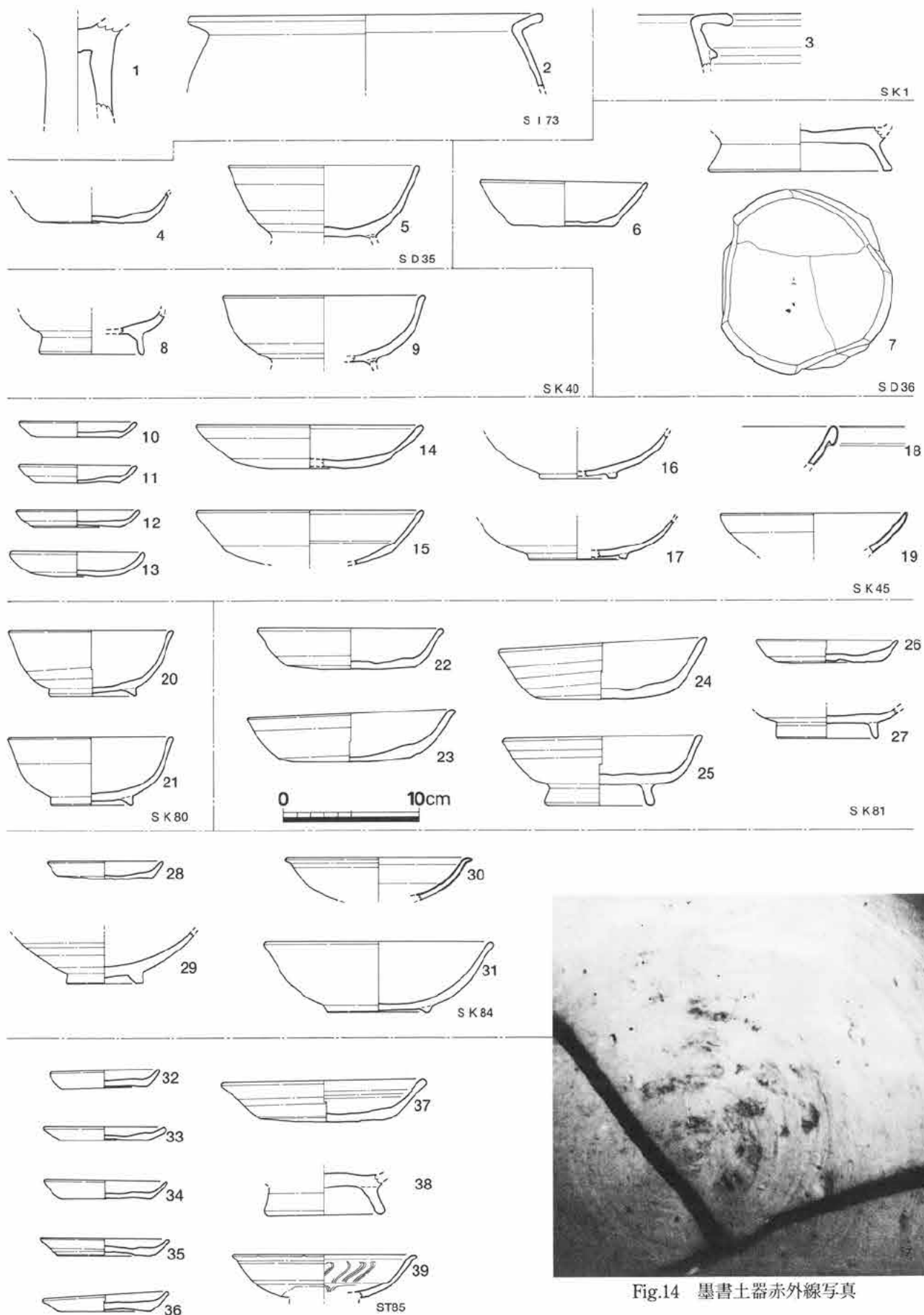
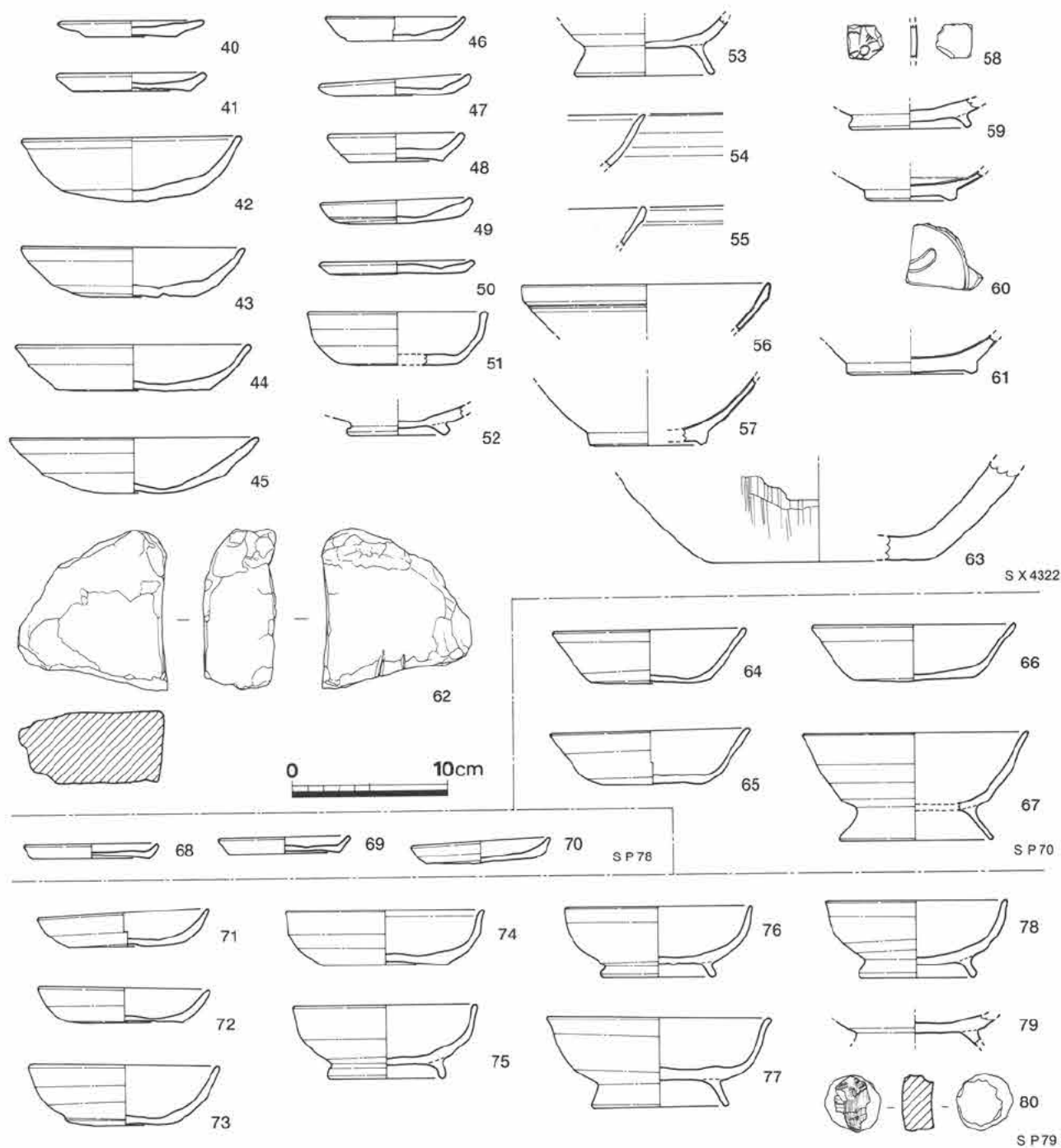


Fig.14 墨書土器赤外線写真

第9図 SI73、SK1・40・45・80・81・84、ST85、SD35・36出土土器実測図(1/4)



第10図 SX4322、SP70・78・79出土遺物実測図(1/4)

第1表 第168次調査出土遺物一覧表①

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器形	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼 成	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面				
1	SI73	弥生土器	高坏			(9.5)	赤褐	にぶい褐	ナデ押え	ナデ押え	4mm程度 の砂粒	良好	外面丹塗	00114
2	〃	〃	甕	26.0		(5.5)	赤褐橙	橙	ナデ 刷毛目	刷毛目	2mm程度 の砂粒	〃	口縁部に一部丹付着	00112
3	SK1	〃	〃			(4.0)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	砂粒	〃		00090
4	SD35	土師器	坏		7.6	(2.0)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒、 赤色粒子	〃	底部回転ヘラ切り	00092
5	〃	〃	椀	14.0		(6.1)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃	内底部スス付着	00091

第2表 第168次調査出土遺物一覧表②

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器形	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面				
6	SD36	土師器	坏	12.3	7.2	3.4	橙	にぶい 橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	良好	底部回転ヘラ切り	00094
7	◇	◇	椀		13.6	(3.3)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	高台内墨書「三万」 高台三ヶ所抉入	00093
8	SK40	黒色土器 A類	椀		7.6	(3.5)	橙	黒	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒	◇		00096
9	◇	◇	◇	14.8		(4.9)	橙	黒	回転ナデ	回転ナデ 横ミガキ	微砂粒	◇	口縁部スス付着	00095
10	SK45	土師器	小皿	8.6	6.0	1.2	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	3mm程度 の砂粒	◇	底部糸切り	00103
11	◇	◇	◇	8.6	6.1	1.4	黒	黒	回転ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒	◇	底部糸切り	00104
12	◇	◇	◇	9.0	6.5	1.2	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒	◇	底部糸切り	00102
13	◇	瓦器	◇	9.8	7.0	1.8	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ ミガキ	細砂粒	◇	底部	00101
14	◇	土師器	坏	16.6	11.6	3.2	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ押え	細砂粒	◇	底部回転ヘラ切り	00097
15	◇	◇	◇	16.6	12.9	4.0	浅黄橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ押え	細砂粒	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00098
16	◇	◇	椀		5.6	(3.1)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ押え	砂粒	◇		00099
17	◇	◇	◇		7.2	(2.8)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ ミガキ	砂粒	◇		00100
18	◇	白磁	◇			(2.9)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇		00105
19	◇	◇	◇	13.6		(3.1)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇		00107
20	SK80	瓦器	◇	12.0	6.4	4.9	灰	黒	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	外面油煙付着	00128
21	◇	◇	◇	12.0	6.0	4.9	灰	黒	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇		00129
22	SK81	土師器	坏	13.6	9.5	3.3	にぶい 黄橙	にぶい 橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00130
23	◇	◇	◇	15.1	10.2	3.6	橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00131
24	◇	◇	◇	15.4	10.2	4.1	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00132
25	◇	◇	◇	14.5	8.1	4.9	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 赤色粒子	◇		00133
26	◇	黒色土器 B類	小皿	10.4	7.9	1.6	黒	黒	回転ナデ ミガキ	回転ナデ ミガキ	微砂粒	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00135
27	◇	灰釉陶器	椀		7.4	(2.2)	灰白	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケスリ	砂粒	◇		00134
28	SK84	土師器	小皿	8.5	6.9	1.3	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	底部糸切り、板目	00136
29	◇	白磁	椀		5.6	3.5	灰白	灰白	回転ナデ 回転ヘラケスリ	回転ナデ	微砂粒	◇		00137
30	◇	◇	◇	13.6		(3.0)	灰黄	灰黄	回転ナデ 回転ヘラケスリ	回転ナデ 回転ヘラケスリ	微砂粒	◇		00138
31	SK84	瓦器	椀	16.8	7.4	5.1	黒	灰	回転ナデ ミガキ	回転ナデ ミガキ	微砂粒	◇	高台内スス付着	00139
32	SK85	土師器	小皿	8.0	6.2	1.2	橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	底部糸切り	00144
33	◇	◇	◇	8.8	6.5	1.3	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 金雲母	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00140
34	◇	◇	◇	8.9	6.3	1.4	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	底部糸切り	00143
35	◇	◇	◇	9.3	7.2	1.3	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00141

第3表 第168次調査出土遺物一覧表③

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器形	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面				
36	SK85	土師器	小皿	9.1	6.8	1.3	にぶい 黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒	良好	底部回転ヘラ切り、板目	00142
37	〃	〃	坏	14.9	9.9	3.2		橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃	底部回転ヘラ切り	00145
38	〃	〃	椀		8.8	(2.4)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00146
39	〃	白磁	〃	13.6		(3.2)	灰白	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	微砂粒	〃		00147
40	SX4322 直上を含む	土師器	托	9.4	5.8	1.1	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り	00185
41	〃	〃	小皿	9.6	7.8	1.1	灰黄褐	にぶい 橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り	00186
42	〃	〃	坏	14.2	9.2	2.9	橙	灰黄	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒、赤色粒子 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00182
43	〃	〃	〃	14.4	8.1	3.6	にぶい橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00183
44	〃	〃	〃	15.2	9.8	2.9	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 赤色粒子	〃	底部回転ヘラ切り	00181
45	〃	〃	〃	16.0	10.5	3.6	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ押え	微砂粒	〃	底部回転ヘラ切り	00184
46	SX4322 底面	〃	小皿	9.2	6.2	1.5	灰黄褐	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00172
47	〃	〃	〃	9.5	7.4	1.2	にぶい橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒、赤色粒子 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00171
48	SX4322 埋土中	〃	〃	8.8	6.1	1.8	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃	底部糸切り	00165
49	〃	〃	〃	9.9	8.3	1.6	褐灰	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00163
50	〃	〃	〃	10.0	8.8	1.1	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00164
51	〃	〃	坏	11.6	7.6	3.4	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り、板目	00162
52	〃	〃	椀		6.6	(1.2)	灰黄	にぶい 橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 金雲母	〃		00160
53	〃	〃	〃		9.0	(3.4)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00161
54	〃	白磁	椀			(3.4)	明緑灰	明緑灰	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00168
55	〃	〃	〃			(2.4)	灰緑白	灰緑白	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00166
56	〃	〃	〃			(3.4)	明緑灰	明緑灰	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00167
57	SX4322 底面	〃	〃		7.6	(5.0)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00174
58	〃	緑釉陶器	〃				明緑	明緑			精良	〃	内面線刻草化文	00176
59	〃	黒色土器 B類	〃				黒	黒	回転ナデ ミガキ	回転ナデ ミガキ	微砂粒	〃		00177
60	〃	白磁	皿		5.8	(1.6)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	〃		00175
61	SX4322 底面	白磁	椀		8.4	(2.1)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	良好		00173
62	SX4322 埋土中	土製品	埴	(9.2)	(9.6)	(4.3)	橙	橙	ケズリ ナデ		細砂粒 赤色粒子	〃		00169
63	〃	石製品	石鍋		14.0	(6.6)	黒灰	灰	ケズリ	ケズリ			滑石製	00170
64	SP70	土師器	坏	12.4	7.7	3.6	にぶい 黄橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	良好	底部回転ヘラ切り、板目	00108
65	〃	〃	〃	12.8	7.0	3.5	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 金雲母	〃	底部回転ヘラ切り	00109

第4表 第168次調査出土遺物一覧表④

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器形	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面				
66	SP70	土師器	坏	13.1	7.9	3.5	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	金雲母	良好	底部回転ヘラ切り、板目	00110
67	◇	◇	椀	14.4	9.8	6.8	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 金雲母	◇		00111
68	SP78	◇	小皿	8.7	7.5	0.9	浅黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	◇	底部糸切り、板目	00116
69	◇	◇	◇	8.5	7.0	1.0	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	金雲母	◇	底部糸切り、板目	00117
70	◇	◇	◇	9.1	7.3	1.4	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	3mm程度の 赤色粒子	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00115
71	SP79	◇	◇	11.1	7.4	2.1	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00120
72	◇	◇	◇	11.1	7.6	2.2	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	◇	底部回転ヘラ切り、板目	00121
73	◇	◇	坏	12.1	7.4	3.9	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 金雲母	◇	底部回転ヘラ切り	00118
74	◇	◇	◇	12.5	8.0	3.5	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 金雲母、石英	◇	底部回転ヘラ切り、板目 外底部スス付着	00119
75	◇	◇	椀	11.8	7.7	4.7	にぶい褐	にぶい褐	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	◇		00122
76	◇	◇	◇	12.0	7.4	4.5	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	◇		00124
77	◇	◇	◇	14.3	8.8	5.7	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	◇		00123
78	◇	黒色土器 A類	◇	11.6	7.5	4.9	橙	黒	回転ナデ	回転ナデ 横ミガキ	赤色粒子	◇		00125
79	◇	黒色土器 B類	◇			(2.0)	黒	黒	回転ナデ ミガキ	回転ナデ ミガキ	微砂粒	◇		00126
80	◇	石製品		3.4		1.9	黒	灰	ケズリ	ケズリ		◇	滑石製石鍋転用品	00127

Ⅲ. まとめ

弥生時代

今回検出した遺構の中で最も先行するものは、竪穴住居SI72・73・86、土坑SK1である。この内、SI73とSK1を完掘し、SI72・86は上面検出を行なったのみである。土坑SK1については周囲に柱穴が存在し、屋根などの施設を伴う貯蔵穴と判断され、同様の遺構は約120m北方の筑後国府跡第59次調査SK3163、約450m東方の神道遺跡第18次調査SK118・120の3例がある。

今回検出の4遺構は竪穴住居SI73、土坑SK1が弥生時代中期後半の遺構と判明するが、SI73・86については検出面出土遺物から同後期～終末期と推定される。調査地周辺では弥生時代中期後半に筑後国府跡朝妻地区、ヘボノ木遺跡南部、神道遺跡西部に広がる集落の存在が知られており、本調査地はこの集落の南西端部に当たることから、その一端を窺える資料が得られた。また、近隣の第122次調査では3軒の弥生時代の竪穴住居が検出されているが、弥生時代終末期のSI4346からは破鏡・土製勾玉などが出土しており、調査地周辺に存在する当該期集落の拠点的なものと考えられる。

奈良時代

上面検出を行なったのみであるが、SI83・89の2軒の竪穴住居がこの時期の遺構と判断される。朝妻・上地区における奈良時代の遺構は、第122次調査SI4334、第59次SI2833・2832・2821・2930、第63次調査SI2991、第69次調査SI3165、第86次調査SI3717、第152次調査SI150・220などの竪穴住居が検出されているが、西海道の一部と推定される東西道路付近に多く検出されるものの、散在した状況である。

平安時代

朝妻地区では8世紀後半～9世紀前半代にかけて遺構が減少する。9世紀中～後半代になると、東西道路に沿った北側付近を中心として、掘立柱建物や大量の食器類が廃棄された土坑などが出現する。特に第86次調査SB3710の如く、道路を意識した三面廂の掘立柱建物があることから、第2期国府段階の客館的な性格を持った施設が朝妻地区に存在した可能性があるが、この時期の遺構は朝妻地区南部に位置する今回の調査地付近では少なく、今回の調査においても検出されていない。

調査地付近に再び遺構が出現するのは10世紀に入ってからで、溝SD35・36・4203・4337がこの時期と考えられる。まず、SD4203については、今回は掘り下げを行っていないが、西側延長部を検出した第109次調査の状況から10世紀前半～同中頃と考えられる。SD4337は、今回は上面検出を行なったのみであり、その北西側延長部を調査した第121・122次調査の際にほとんど遺物が出土していないため、遺物から時期を決定することは困難である。但し、調査地東端部での検出状況などから判断すれば、SD4203と同時存在である可能性もあるが、むしろ、SD4203が10世紀中頃に本調査地の西側に政庁が移転し、その施設を造営する際に埋め戻されていることを考慮すれば、政庁部分を避けて流路を北側へ変更した導水路と想定される。次にSD35とそれよりも後出するSD36については、10世紀後半代頃に比定されよう。SD35・4203・4337はいずれも約100m南東方に涌出する朝妻清水を水源とした導水路と考えられる溝であるが、恒常的に水が流れた形跡はなく、短期間しか使用されていないものと見られ、また、それぞれの溝が水を供給したと推定される施設についても、現段階ではまだ判明していない。

遺水遺構SX4322については、検出遺構の項で記した通り、11世紀代～12世紀前半頃と比定される。即ち、第3期政庁が朝妻に存在した時期に、政庁の東隣接地に営まれた国司館と想定される施設の一部として、造られ、『高良記』の記事に見られる延久五年(1073)の「今ノ苅」への移転後、在国司居屋敷となった時期まで存続した遺構と考えられる。その詳細・背景は既に第122次調査の報文(『筑後国府跡』平成6年度発掘調査概要 久留米市文化財調査報告書第100集 1995 所収)に述べられているため本書では省略するが、今回の調査では蛇行した状況がより明確に見られ、2回の改修を受けていることが判明した。なお、今回の調査ではこの遺構と同時期の掘立柱建物などは検出されず、同様に顕著な遺構が検出されていない第90次調査地など、本調査地から南側は庭園であったと考えられる。

その他、SK37・40・45・75・80・81・84の土坑群については、方形土坑SK40が出土遺物からは10世紀前半代頃と見られるが、埋土の色調や類例の少ない方形土坑である点が周辺の該期の遺構と違うことを考慮すれば、第121次調査SK土坑に類例がある13世紀代のものである可能性もある。その他の土坑はいずれも12世紀代に営まれたものである。土墳墓SK82・85については、共に明確な副葬品と見られる遺物はなく、埋土中から出土した遺物からは土坑群と明確な時期差は見られないことから、12世紀代と推定される。

以上、今回の調査成果と朝妻地区の概況を簡略に記したが、国司館及び在国司居屋敷の主要部分となる同地区北側の掘立柱建物群などについては、今だに明確な変遷や相関関係を把握するに至っていない状況である。今後、過去の調査成果も含め再検討を行いたい。

報告書抄録

ふりがな	ちくごこくふあとだい168じょうさ
書 名	筑後国府跡第168次調査
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第164集
編・著者名	水原道範
編集機関	久留米市教育委員会
所 在 地	〒830 - 8520 福岡県久留米市城南町15 - 3 Ⅲ, 0942 - 30 - 9225
発行年月日	西暦2000年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 第168次調査	ふくおかけん 福岡県 くろめし 久留米市 あさづままち 朝妻町 1402 - 1	40203	30112	33° 18' 31"	130° 33' 00"	2000.4.25 } 2000.7.5	636m ²	共同住宅 建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
筑後国府跡 第168次調査	集落地	弥生時代	竪穴住居 3軒 土坑 1基	弥生土器	第3期政庁推定地の隣接 地を調査。 第122次調査の際に検出 された遺水遺構の南側延長 部を検出。調査地周辺は国 司館の庭園部分と想定され る。
	集落地	奈良時代	竪穴住居 2軒	土師器	
	官 衙	平安時代	溝 4条	須恵器	
			土坑 7基	黒色土器	
			土壇墓 2基	輸入陶磁器	
			遺水遺構 1	瓦類	

筑後国府跡

- 第168次調査 -

久留米市文化財調査報告書 第164集

平成12年9月30日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15・3

編集 教育文化部文化財保護課

TEL. 0942-30-9225

印刷 (株)エヌ・ティ・パック